

本を紹介します

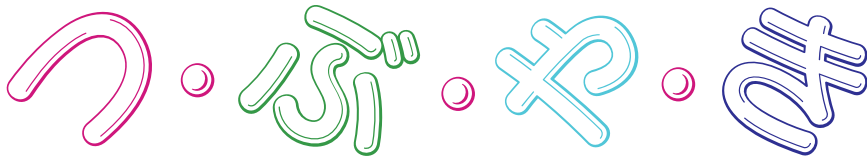
親と子と教職員の教育相談室 前室長 徳永 恭子

漂流少女一夜の街に居場所を求めて―

著者 橘 ジュン 2010年7月発行 出版 太郎次郎社エディタス

著者の橘ジュンさんは、新宿や渋谷の繁華街を歩き、気になる子がいると声をかける「声かけ取材」を長年続け、若者との出会いやその様子を書いている。「漂流する少女たち」は、大人にうかがい知れない部分で、孤独に陥ったり、周囲の期待に押しつぶされそうになったり、自分というものを見失ったりしている。居場所を求めて路上でたむろする少女、ネットカフェで寝泊まりする子、コンビニで時間をつぶす少女。様々な状況の子に取材をしている。中には出産を経験した少女もいる。そういう子を病院に連

れて行ったり、区役所に連れて行ったりと支援もしながら、この本を書いた。若者たちは自己否定と大人社会への不信で一杯だ。そういう子たちに付き合いながら、若者のSOSの合図とともに行動しながら、繋がれる場所や繋がれるツールを提供している。実際の場に立ち合いながら行動する彼女に敬意を持つとともに、心底感動する。これは渋谷、新宿、池袋といった東京独自の問題ではなく、地方都市でも見られる若者の姿ではないかと思う。社会的な支援が必要だと痛感した本だった。



The Catcher in the Rye

奈良県高等学校教職員組合 辻村 美佐子

奈良県の県立高校で教育相談を担当しています。教諭、養護教諭、SC（スクールカウンセラー）が連携して活動できることを目指しています。今回この欄に登場する機会をいただき、それぞれの立場から教育相談についての思いを巡らせてみました。◇SCから…「今の気分を色で表すと？」生徒を対象に心理学の話をする機会があり、そんな問いかけをしました。不安や緊張、梅雨時の天候も相まってか、ダークな色で表す生徒が多いのが印象的でした。しばらく話をした後、芸術療法に触れる機会を少し。雑誌を切り抜いて画用紙に貼り付け、作品を完成させていくうちに皆の表情は変わっていききました。最後にもう一度、今の気分を尋ねてみると、晴れやかな表情とともに先程とは違う色が教室に広がります。様々に変化する生徒たちの豊かで柔軟な心に触れた瞬間でした。◇養護教諭から…「ちょっと話を聞いてほしい」、そんな生徒がまずやってくるのが保健室。話を聞いてみて専門的にカウンセリングを受けた方が良い場合はSCへ促します。そしてSCと課題を共有しながらさらに教員へ伝える役割を担っていま

す。保健室は教育相談の中心となって様々な人を結ぶ大事な場所であると思っています。◇最後に…サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」は、高校生の頃に読んでとても感動した小説でした。私の心に漠然と、強烈に、刻まれた主人公の最後の語りはこんな内容でした。「広いライ麦の畑やなんかがあって、そこで小さな子どもたちが、みんなで遊んでいる。何千っていう子どもたちがいて、僕はあぶない崖のふちに立っている。僕のやる仕事は、誰でも崖から転がり落ちそうになったら、その子をつかまえること。子どもたちは走っているときにどこを通っているかなんて見やしないから、そんなときに僕は、どっかから、さっととび出して行って、その子をつかまえてやらなきゃならないんだ。ライ麦畑のつかまえ役、そういったものに僕はなりたいんだよ。」…それから数十年、最近、気づいたことがあります。教育相談＝The Catcher in the Ryeなのかもしれない。これからもチームプレーの要となって子どもたちや先生方を支えていきたいと思っています。